

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会
聖翼

——詩篇第63篇——

1991年1月6日

小池辰雄

わが神よ 求めざるをえません 自由とは天的必然「アナンケー」(ざるを得ない) 愛せざるを得ない 敬天愛人的な民主主義 寝ても覚めてもキリストの中 み翼の蔭 霊の翼で翔けめぐる 人鳥

【詩篇63】(私訳)

ダビデの絃歌、ユダの曠野にいた時の。

1 ああ神よ、あなたはわが神！

わたしは切にあなたを求め。

わが魂^{たま}はあなたに渴く。

わが身もあなたを恋慕う。

水なき乾^かれた瘦^やせ地のように。

2 さればこそ汝^なが威^ち力^{から}と汝^なが栄^さ光^{かえ}を見んとて

汝^なが聖所でああなたに目をそそいだ。

3 汝^なが愛は生命にもまさるので、

わが唇はあなたを讃美する。

4 されば生涯あなたを寿^{ことほ}ぎ、

聖名に在^{もろて}ってわが双^{もろて}手を挙げる。

5 わが魂^{たま}が髓^{あぢら}と脂^{あぢら}で満たされる如く、

歡喜の唇でわが口は讃える。

6 わが床の上でああなたを想い起^{とこし}こし、

夜^よを護^もるなべにあなたを冥想するときに。

7 そはあなたがわが助けで在り給うたので、

汝^ながみ翼の蔭で私は歡呼する。

8 わが魂はあなたに追いつがる、

汝^なが右の手は私をば確^しかと支えた。

9 だが彼らはわが魂を滅ぼさんとたずね求め、

深い低地をうろつく。



10 彼らは剣の手にかかり、

山犬の餌食^{えじき}となろう。

11 されど主は神に在^{ようじ}って欣喜、

彼によつて誓う者はみな誇れるが、

げにいつわりを語る者の口は緘^{ふた}がる。

●わが神よ

この詩篇63篇のような現実を根底にしなかったならば、本当は進めないという気持です。私は自分の訳を読みます。

「ああ神よ、あなたはわが神！」

わたしは切にあなたを求め。

わが魂^{たま}はあなたに渴く。

わが身もあなたを恋慕う。

水なき乾^かれた瘦^やせ地のように。

「エロヒーム エーリー アッター」と言つて、「ああ神よ」はこの「エロヒーム」という言葉が使つてある。「エール」というのは「神」という字で、「力強きもの」という本来の意味ですけれども、その複数の形で、「神々」ではない。文法的には「神々」ですけれども、これは「莊嚴の複数」といつて、「神」のことなんです。

「神よ」(エロヒーム)

と。そして、

「わが神よ」(エーリー)

と。今度は、それが「エーリー」なんです。キリストが十字架の上で、

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

と言つた、あの「エーリー」「わが神」です。「エール」という。それから、「イー」というのは「我^{わが}」という接尾語です。「アッター」「あなたは」と。

「神よ、わが神よ、あなたは」

と。そういう出だしなんです。

これは、

ダビデの絃歌ユダの荒野にいた時の。

と、一番先に書いてあります。「絃歌」は「ミズモール」といつて、琴を弾きながら歌う歌です。多分、エンゲデの谷あたりにいた時に、サウルに追われていたダビデの現場だと思ひますが。自分の王様に追われながら、決して抵抗はしないで逃げ回つていく。しかし、彼はただ逃げたのではない。いつも神に呼びかかつていた。だから、危ないところも助かつて行つたわけです。



●求めざるをえません

わたしは切にあなたを求める。

と。キリストが、

「求めよ、さらば与えられん」

と言われた。これはまさに、キリストが、

「わたしを求めなさい」

と。だから、「わたしは切にあなたを求める」の奥には、我々にとってはキリストが、

「わたしを求めなさい。わたしはお前を求めているよ」

と。まずその大前提が隠れているわけです。

我々の信仰の土台は、いつも向こう側です。こっち側ではない。我々がどんなに祈ろうが、叫ぼうが、その根底は向こう側から来ている。

「求めざるをえません」

と、こういうわけです。この「ざるを得ない」のは、上から力が来ているから、上から愛が来ているから、上から光が来ているから。だから、

「ざるを得ない」

そういう角度です。

私は他のグループをなにも批判したくはないけれども、あるグループにいた人で、時々私に詳しい手紙を送ってくる不思議な人がある。それが、

「ある大きなグループは大きな欠陥がある。それは本当に平伏^{ひれふ}していない」

というようにことを書いてきました。

本当に平伏するというのは、これもみんな私は、「ざるを得ない」んです。平伏さざるを得ない。求めざるを得ない。ということは、上からの力、光、愛、生命、これがもう絶対恩寵として来ているからです。観念で言っているのではないですよ。「ざるを得ない」んです。

西郷南洲が、

「天を相手とせよ」

と言うが、

「天を相手とせざるを得ない。キリストを相手とせざるを得ない」

と。その在り方というものが――空気は、私たちは吸わざるを得ないでしょ。もう意識していない――その意識していないような、「ざるを得ない」世界が一番本当の自然の世界。第二の自然と言ってもいいし、あるいは「靈然」と言ってもいい。

この「然」という字は素晴らしい字だね。これは「燃える」という字でもある。杜甫の詩を読むと書いてある。この「然」が「燃」という字なんです、火編がなくても。燃えざるを得ない。



●自由とは天的必然

どうぞ、今年から我々はこの「ざるを得ない」人になつていいのではないか。

「アナンケー」（ざるを得ない）

とギリシア語でパウロが言っている。エレミヤが、

「自分は黙^{もだ}そうとしても、黙すわけにいかない。語らざるを得ない」

と言った。そういうものは天的必然という。この天的必然が本当の自由です。これが本当の自由。本当の自由とは天的必然なんです。だから、この必然と自由は同じことです。それが本当の「法」の世界。「水は低きに流れ去る」という。これも、水は低きに流れ去らざるを得ない。自然法則はみんな「ざるを得ない」。そういう天的必然——ざるを得ない、本当の自由——これはないです、普通には日本には。我々はその証者として、これから本当に生きざるを得ない。

「ざるを得ない人が一番本当の仕事をする」

と、ヒルティも言ってます。ルターも、

「われここに在らざるを得ない、かくせざるを得ない」

と、あのウォルムスの会議で叫んだのがやはり、「ざるを得ない」ひびきです。

そうしたら、楽でしょうがない。楽で、楽しくしょうがない。ぜひとも、そういう生き方をしてください。何も心配はいらんですよ。人生は、ある瞬間を——決して他のもので惑わされてはいかん——そいつを掴んでいかないと。

●「アナンケー」（ざるを得ない）

「あなたを切に求める」

という。

「私はなかなか切に求められません」

ではない。切に求めざるを得ない。キリストが呼んでいるんだもの。答えざるを得ない。つかまえているんだもの。立たざるをえない。みんなそうです。だから、ギリシア語の

「アナンケー」「ざるを得ない」

という言葉覚えてください。

「たとえば、キリストに棄てられても、兄弟のためには福音を語らざるを得ない」

というのがパウロのもの凄い悲願だった（ローマ書9章）。

だから、皆さんはもう遠慮なんかいらんですよ。語らざるを得ないんだから。遠慮したら、それはむしろキリストに背いていることになる。

そういうところには本当の権威がある。こっちは、神・キリストに対しては完全に受身です。完全に受身な世界が一番積極的な世界になる。そうなんだよ。女性は受身ですけども、本当の信頼の世界です。



キリストがなぜ「小羊」と言われるかというところ、小羊は非常に優しい力のない動物だ。ところが、この無力の、ただ従わざるを得ないところのキリストが獅子よりも強い。

「羔こひつの怒り」

という。それは普通の人にキリストのことを「羔」なんて言ったって、何のことかわけが分からない。いと小さきものが、いや実は無なるものが、無限無量でしょ。この秘訣を生活の秘訣にしてください。そうしたらもう、楽で力が来てしょうがない。絶対に行き詰まらん。

今は、若い人たちが本当に大事なんだ。使命があるんだよ、男でも女でも。お年寄りやおばさんは使命がないと言うのではない（笑）。それぞれみんなご使命があります。私なんかは一番老人なんだけれども。ゲーテはさんざんあの偉大な仕事をして、82かそこらで天界へいつてしまったけれども、私は86になつてもボヤボヤしている。だから、私はまだ10年生きざるを得ない。あと10年、詩を書かざるを得ない。

今日の題は、「ざるを得ない」と書けばよかったな、「聖翼」と書いたが。まあ、聖翼は聖翼でいいけれども。

●愛せざるを得ない

いいですか。

わが魂たまはあなたに渴く。

と。いわゆる文化文明でこと足りているひとは——特に日本はそうだよな、もう何でも豊かだよ。物がありすぎているから——神さまを求めない。まあ、元日に明治神宮なんてやっているだけのほなしだ。おもしろいね、

「明治神宮、明治神宮」

と言つて大騒ぎしている。明治天皇は帝王としては立派なことをなさった方だけれども。

この「わが魂」の、「魂」という字は英語でいうと「ソウル」です、「スピリット」ではない。ドイツ語でいうと、「ガイスト」ではなくて、「ゼーレ」の方です。「霊」ではなく「魂」の方。人間の内の構造はもちろん単なる分析的には考えられませんが、

「霊—魂—心—体」

という。その次に体なんだ。

わが身もあなたを恋慕う。

と書いてある。要するに、「全存在が」ということ。ちょうど、

水なき乾かれた瘦やせ地のように。

あるいは、谷川の水を慕いあえぐ鹿のように（詩篇42篇）。神さまに向かって、キリストに向かって渴くひとは幸いですよ。

「義に飢え渴く者はさいわいなり」



なんてキリストが言われた。義の本体はキリストだからね。観念じゃないから。キリストだけが義人なんだ。神さまの言いつけを100%に守り従う人が「義人」なんだ。だから、

「義人なし。一人だになし」

とパウロが言ったのはそのことです。

「従い、守る」ということは、本当は

「体現する」

ということなんだ。聖意を体現するもの、それが義人。「体^{からだ}」というのは

「全存在で」

ということ。だから、

「あなただけが私の神さまです。私の全存在はあなたに渴いて求めています」

と。みんなこれがさつきから申し上げている「ざるを得ない」世界です。

「他のものでは私は満たされません。だめになります」

と。「信仰、信仰」なんて言うけれども、これも、

「信ぜざるを得ない。愛せざるを得ない」

ということ。キリストにかく愛されていたら、愛せざるを得ない。私はそういう、

「愛せざるを得ない」

を永いこと知らなかったね、無教会にいたときは。

「神さまを愛するといったって、どういうことか？」

と分からなかった。

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主たる汝の神を愛せよ」

なんて、キリストが言われるものだからさ。キリストは少し意地がわるいよ、あんな言い方をして。

「全存在で神さまを求めざるを得ないではないか。こんなに愛されているではないか」

と。本当はそうなんだ。愛され、救われ、助けられ、贖われ——全部こっちは受身だからね——生かされ、それだから、力付けられて、愛せざるを得ない、信ぜざるを得ない。何ということはない。

●敬天愛人的な民主主義

東大の私の担任の生徒がクラス会に呼んでくれたから、また一席やった。みんな一時的には感じたりなんかするが、けれども結局、全存在で求めてこないんだ。そんな一時的な感興ではだめですよ。ということは、他のもので満たされているかのごときで——本当は満たされていないんだよ——それでいい気になっている。まあ、日本はしょうがないね。

「敬天愛人」的民主主義であるか。西郷南洲の



「敬天」

が抜けている。そして隣人を愛する。敬天愛人的な民主主義でなくて、今のはみんな人本的な民主主義だからね。人間が、自己が中心の民主主義だから、そんなものは民主主義なんて言ったってだめだ。だから、日本はいつまでたってもだめなんです。それを公の学校では、

「宗教は……」

なんて言って塞いでいる。日本は精神的に一番ダメだから、本当に情けないね。

あなた方一人びとりの存在はもの凄い使命と責任がある。あなた方は責任ある使命ある存在です。その故に、栄光ある存在です。そういう意味においては、決して卑下することはない。私は、詩の上でうんと書くから。それを世界に投じなければならない。日本は結局人物がいらない。幕末にはいたけれども。それは若い人がわるいのではない。教育者自身がダメだから。

ですから、この詩篇63篇の第1節は非常に大事なわけです。

「キリストさま、あなたは私の一切です。

私の魂はあなたに渴いています。

全存在があなたを慕わざるを得ません。

あなたの救いによつて、愛によつて、力によつて、光によつて、

かく生かされているんですから」

と。そういう根底がある。実力の根底を持つている福音書ですから、その実力を受けとっていく。

「すべし、すべからず」

なんていう律法^{おきて}ではないんだ。どうしてこんな素晴らしい世界をみんな気がつかないのだろうかな。あなた方、一対一で本当に伝道しなさいよ。伝道せざるを得なくなります。

●寝ても覚めてもキリストの中

²さればこそ^な汝が^{ちから}威力と^な汝が^{さかえ}栄光を見んとて

^な汝が聖所であなただに目をこそそいだ。

この「聖所」という言い方は、神殿がある意味においてエルサレムの中心になっているから、「聖所」という言葉が出てくる。けれども、我々にとつての聖所は、

「我々自身が神の宮」

とパウロが言っているとおり、キリスト自身が居給うところが即ち聖所である。到るところ聖所である。正にキリストの^{ちから}威力、キリストの栄光です。

³汝が^な愛は生命にもまさるので、

わが唇はあなたを讃美する。



「あなたの愛は生命にもまさる」

とは非常に素晴らしい言葉ですね。キリストのくださる生命の質は愛です。

「永遠の生命」

なんていったって、ただ永い生命ではない。質的に滅びない生命です。それはなぜ質的に滅びないかというと、愛が中心にあるから。キリストの生命の愛がある。キリストの生命は即、愛だからね。ただ「生きている」なんていうのではない。生かしている。我々を生かす生命というのは愛だもの。だから、我々のいわゆる生命よりもまさることは当然なんです。あなたの愛がこなかったら、この生命は滅びてしまう。「永遠の生命」という生命は愛によるから。ヨハネ書簡の中にも出ている。

「わが唇はあなたを讃美する」

と。それはまあ讃美は唇が讃美するんだけど、なにも唇が問題ではない。祈りも唇で祈る。歌うのも。讃美歌を歌うときに本当に魂をこめて歌えば、それは本当に歌いながらもう既にこの救いの中に入っている。

4 されば生涯あなたを寿ぎ、

聖名に在ってわが双手を挙げる。

「万歳！」というようなくあいに、双手をあげてあなたを讃美する。聖名にあつて。聖名というものの中にある。聖名は現実だからね。空名ではなく、実名だから。

5 わが魂が髓と脂で満たされる如く、

歡喜の唇でわが口は讃える。

「髓と脂」、骨髓の髓だね。

6 わが床の上であなたを想い起し、

夜を護るなべにあなたを冥想するときに。

これはもう私のことをそのまま言っているようだな。私はよく、夜中にちよつと目が覚めると、祈り込むから。そうすると今度は、夢の中でそういう現実に入る。おもしろいよ。昨日も何かあったな。なにか集会の夢を見てしまった。よその牧師さんのところに出かけて行って、その集会でもって一席やった夢だよ、昨日は。夢でありながら、まるで現実みたいなんです。非常にはつきりしている。寝ても覚めても、キリストの中に休らい、キリストの力で動く。まあ自由自在だね。

●み翼の蔭

7 そはあなたがわが助けで在り給うたので、

汝がみ翼の蔭で私は歡呼する。

「み翼の蔭」というような言い方はちよこちよこある。「蔭」ばかりではない。「み翼」はたくさん出てくる。キリスト自身が仰ったものな、



「雌鳥が翼の下に雛を守るように、エルサレムの民をかくも顧みたのに、さっぱり受けとらない」

と言って嘆いたキリストの言葉がある。マタイ伝の23章かどこかに出ていたね。「蔭」でなく、翼に乗せて走るのがある。これは申命記32章、モーセの歌というところにある。この申命記32章は、私はいつか訳したことがある。素晴らしい歌だから。「モーセの歌」といっても、モーセが作ったわけではないけれども。

「10 エホバこれを荒野の地に見、これに獣の吼る曠野に遇い、環りかこみて之をいたわり、眼の珠のごとくにこれを護りたまえり。11 鷺のその巢雛を喚起しその子の上にまい翔けるごとくエホバその羽を展て彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり。12 エホバは只独にてかれを導きたまえり。別神はこれとともならざりき。」(申命記32・10・12)

と。この申命記32章11節は驚くべき言葉だね。

「エホバが、神さまが、羽を広げて」

と言うんだから。こんな言い方をして、神は羽があるのかと。

「イスラエルの民が導かれたのは、まるで鷺が翼の上に乗せて行つたように、神さまがその羽をのべて彼らをのせて、その翼をもつてこれを背負つて行つた」

と。「鷺のごとく」とは書いてないんだ。「エホバその羽を展て」とは、大胆な表現だよな。聖書だから、みんななんとなく読んでいるけれども、これは大変な言葉だ。

「エホバは只独にてかれを導きたまえり。別神はこれとともならざりき」と。ところが、別神に心を奪われたやつがたくさんある。

「聖霊、鳩のごとく」

というのもそうでしょ。これも「翼」でしょ。

●霊の翼で翔けめぐる

私は、自分の腕が翼になって、スーッと空中を飛ぶ夢を時々みる。この頃はあまりみないけれども。獅子に追いかけて、スーッと上がっていく。ざまあみろというわけで(笑)。全くおもしろいよな。あなた方はよほど普通だね、私はやつぱり変わっているんだな。変人なんだな。手が翼に変わる。天使と同じだな――天使は手があつてそれから翼があるか――まあなんでもいいや。私は本当に鳥が好きでね、時々、テレビでも鳥の映画なんかを見ているけれども。人間でなければ、もう文句なしに鳥になりたいね。もうこれをやめて、キリストが「お前、鳥にしてやる」と言ったら、鳥になってしまう。

けれども、いいよ。私は霊の翼で、あなた方も霊の翼をもつて、天翔けつてください。



なにも飛行機に乗る必要はない。グライダーに乗る必要もない。霊の翼でもって、過去・現在・未来の世界に天翔けるから。あまりいろんなことを言うと、私の詩の内容になるから、やめておこう。とんでもない詩だから。もう時々、しゃべりたくなって困るよ。それはダントでもゲーテも思いもつかないことを書くからね。

空想力がわりあい強いんだね、私は。記憶力はダメなんだ。藤井先生のところで聖句の暗唱をさせられたが、私は聖句をその通り言ったことはまれで、なにか自分で作ってしまう。先生は半分笑っていたよ。それくらい記憶はダメなんだ。勝手に聖句を作ってしまうんだからね。まあ、その聖句は大体、聖書のどのへんにあるかくらいのは分かるけれども、さてそれはどういう文句であるかは忘れてしまう。でも、キリストでもパウロでも旧約通りには引用しなかった。

霊の翼でもって我々は過去・現在・未来を翔けめぐる。私は現代の天文学も少し、素人的には勉強したいと思ってます。読みたい本がたくさんある。大変だ。あまりテレビを見ているとなにも読めなくなる。私はもちろんそんなに見ないですよ。今の若いのはテレビを見すぎだね。やはり本を読まなければダメだな。マンガもやめだ。しょうがないな、あのマンガばかりは。

「愚かにして智慧なき民なり」

と、この32章6節にも書いてあるではないか。

「⁶愚かにして智慧なき民よ汝らがエホバに報ゆることは是の^{かく}ごとくなるか。エ

ホバは汝の父にして汝を贖いまた汝を造り汝を建てたまわずや。」(申命記32・

6)

日本人は帰り行くべきところがないんだ。そこは何と言ったって、ヨーロッパは帰り行くところがある。ギリシア正教があるし、ローマンカトリックがあるし、プロテスタントがある。とにかくそれはみんなキリスト中心に、神中心のところに帰っていくんだけれども、それがいないだからね、日本人は。信仰は自由なんだから、大いに帰るところを自分でつくつたらいい、選んだらいい。

●人鳥

私は、今日、この「聖翼」ということにおいて、我々が魂の翼、霊翼をいただいている。これは要するに聖霊の世界です。それでもって上から鳥のように鳥瞰することができ。ものの本質を見破ることができる。そしてまた、霊の翼に乗せて人を助けることができる。そういう意味における翼です。鳥以上の鳥です。人魚という魚があるけれども、今度は人鳥だ。「人鳥」なんていう言葉は初めて言う。誰も言わんだろ。我々は人鳥です。自由自在にどこへでもやっていく。それはまた祈りの世界でできる。祈りの世界で。それは本当に天の法則で動いているんだ、みんなこの風の法則で。鳥も風の法則で動いている。我々は霊空の



世界をそのように自由に動いて、そして、なるほどこれは楽しいなと。

ある人のために祈るときに、その人の現場に、冥想しながらそこへ自分が行って、按手してあげながら祈っているような境地に入るわけです。漠然と祈ったってダメですよ。キリストが、「癒えたり」と仰ったね、瞬間的に。凄いな、キリストの現実は。だから、御霊の世界でキリストと本当に一つになることです。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

と。その点ではヨハネ伝の17章です。どうぞ、そういう現実を、「ざるを得ない」現実に入って、そして、この霊の翼をもって自由自在に動いていく。過去の世界であろうと、現在の世界であろうと、未来の世界であろうと。それが本当の

「永遠の今」

ということ。そういう魂になって、やってくださいよ。お家に帰られましたならば、私の書いた『詩篇珠玉集』の詩篇63篇のところを読んでみてください。場所によつては、もつとずっと詳しく書いてあります。今日言ったことが、書いてないものももちろんあります。「翼」はあちらこちらにあるから、それもみんな63篇のところに書いてあります。

8 わが魂はあなたに追いつがる、

汝が右の手は私をば確かと支えた。

「右の手」とは力の象徴なんです。あなたの力ある右の手が私を支えた。それはキリストの中に祈り入ること、冥想することです。そうでないやつらはこんなことになってしまうということが9、10、11節に出ている。

9 だが彼らはわが魂を滅ぼさんとたずね求め、

深い低地をうろつく。

10 彼らは剣の手にかかり、

山犬の餌食となろう。

11 されど主は神に在って欣喜、

彼によつて誓う者はみな誇れるが、

げにいつわりを語る者の口は緘がる。

今日のところは、第10巻『聖書は大ドラマである』の「4月25日」のところだ。神さまを愛慕するところの、

「愛慕の源は、キリストの十字架・復活・聖霊の絶対的な愛に圧倒される事態である」と。それが我々が慕わざるをえないところの原動力だということです。

